



千葉県生まれ。千葉大学大学院修了。千葉県の公立中学校教諭、千葉大学教育学部附属中学校教諭を経て、現職。共著書に「中学生を作文好きにする！新レシビ60&ワークシート」（明治図書出版）など。

# 普段使いのデジタル教科書

教科書の改訂に合わせて、「光村デジタル教科書」も新しくなりました。今号より、主に指導者用デジタル教科書にスポットを当て、国語の授業の中での効果的な使い方についてご紹介していきます。

## 1 ひまわり

こんにちは。渡辺光輝と申します。これから六回にわたってデジタル教科書についての連載を担当することになりました。よろしくお願います。

初回なので自己紹介をします。私は教師十八年目、千葉県の公立中などを経て、今の職場で働いています。国語の授業についてはいろいろと取り組んできたつもりですが、本格的にデジタル教科書を使った授業をするのは、実はほとんど初めてです。だからそんなに詳しいわけはありません。ごく普通の教師が、デジタル教科書を使ったらこんな授業になったよという赤裸々(?)な「奮闘記」を書くつもりです。そして「デジタル教科書で、どうやって国語の授業をしたらい

## 2 気がかりなことも少々……

初任の頃、とても厳しい指導教員の先生に「教師はチョークとトークで勝負ができて一人前だ」と言われました。小細工をせずに、教師の語りだけで授業ができるように精進しなさいという教えです。また、教材作りでこんなことも言われました。ある教材で、ちよつと変わつた橋の構造を説明する文章がありました。その橋がとてもイメージしにくいものだったので、実際の写真を探してきた

いの？」と悩んでいる先生方や、「デジタル教科書をこれから使ってみたい！」と感じている先生方と一緒に、デジタル教科書を活用した国語の授業について考えていければと思っています。

り、図を描いたりして、それらをプリントにして生徒に配ろうと考えていました。資料作りに必死になっている私を見た指導教員の先生が、ほそつと、「それを文章から読み取らせるのが、国語の授業なんじゃないのかなあ。何でもわかりやすくすればいいというものじゃないよ」とおっしゃったのです。よかれと思って用意した資料が、必ずしも生徒の国語の力を伸ばす結果につながるとは限らないなんて……。それ以来、授業での資料の扱いを慎重に考えるようになりました。

デジタル教科書の活用についても、これと同じようなことが起こってしまわなにか、ちよつと気にかかっています。用意された資料が親切すぎると、生徒の力が伸びなくなってしまうのではないかと。でも、それは裏を返せば、「こんな使い方だったら国語の力を伸ばす」と胸

を張って言えるような活用法を見つけられたいということでした。

私自身、まだまだ十分に使いこなしているとはいいたのですが、「デジタル教科書を使うことで、今までできなかったことができるようになった」とか、「こんなに効率的になった」とか「生徒の意欲がアップした」と言えるような活用例を、これからたくさん見つけていきたいと思っています。

## 3 普段使いのデジタル教科書へ

この四月から、本格的にデジタル教科書を使い始めています。こういうツールは、「習うより慣れろ」で、使い込むうちによさがわかる面が大きいと思います。たまに取り出すくらいでは、操作もぎこちないし、うまく生徒の思考に沿って柔軟に使うこともできません。だから「普段使い」をして、毎日当たり前のようデジタル教科書を使い、自分自身がツールに慣れるように意識しました。

ちなみに、本校のICT環境は、つり下げスクリーンとプロジェクトが教室に常備され、ノートパソコンからコードでつないで投影する形になっています。パ

ソコンを教室に持ち込めば、すぐに接続して投影することができます。以前はプロジェクトやスクリーンを教室に持ち込んで使っていたこともあったので、それと比べたら、手軽に投影できる今の環境はとてもありがたいです。なお、電子黒板は、各階にあるのですが、運ぶのに手間がかかるのと表示される字が小さすぎて後ろからは見えないので、使うことは断念しました。

## 4 四月からこんな感じで活用しています

四月からの三か月間、授業でどのようにデジタル教科書を活用したのかを全て書き出してみます。これで「普段使いのデジタル教科書」というイメージが伝わるのではと思います。

### ■「野原はったつ」

- ・作者・工藤直子さんの動画を見る。
- ・教科書画面に、詩の表現技法について書き込む。
- 「花曇りの向こう」
- ・漢字フラッシュカード
- ・朗読を聞く。
- ・登場人物の設定がわかる表現を抜

き出す。

- ・作品の大体の内容を確認する。
- ・「駄菓子屋」などの資料映像を見る。
- 「ダイコンは大きな根？」
- ・漢字フラッシュカード
- ・朗読を聞く。
- ・段落分け、段落構成を確認する。
- ・「問いと答え」の部分抜き出す。
- ・「説明の工夫」を指摘する（書き込み）。
- ・他のだまし絵の画像を見る。

### ■「ちよつと立ち止まって」

- ・漢字フラッシュカード
- ・朗読を聞く。
- ・段落分け、段落構成を確認する。
- ・キーワードの抜き出しで要約のしかたを確認する。
- ・他のだまし絵の画像を見る。

※これらの授業の他に「話すこと・聞くこと」と漢字の部首の学習を行いました。その授業ではデジタル教科書は使用していません。

## 5 この使い方はよかった！

こうして使った中で、特に「これはよかった！」と思えるおすすめの活用例を

いくつか紹介します。

①工藤直子さんの動画(「野原はうたう」)  
まず、おすすめは「のはらうた」の作者、工藤直子さんの動画です。

教科書に載っている文学作品などの作者が、実際に話している映像を見ると、生徒は「おおーっ」という反応を見せます。そして一気に作品に親しみをもつようになります。やはり、生身の人間が言葉紡いでいるというリアリティーが、生徒に響くのでしょうか。

この工藤さんの動画で、特に私がいちばん感じたのは、作者が自作の詩を朗読しているの聞くことができるということです。「おれはかまきり」という詩では、まず「生まれたばかりのちびかまきり」になりきって朗読します。次に「こんな読み方もできますよ」と、「元氣いっぱいのかまきりゆじ坊や」として朗読。さらには、高校生でちよつとやさぐれたバージョンの「かまきりゆじ坊や」の朗読までしてくれます。計三パターンの朗読の表現を披露しています。

この動画を見てひらめきました。生徒にも、一つの詩を、いろいろな人物設定で読み分けさせてみようと思ったのです。例えば「けやきだいさく」の「いのち」

いのですが、意外によく使うのがCです。デジタル教科書をよく使うようになってから、この全文表示のよさを実感することができました。

全文表示画面は、文字が細かいので、文章中の語句を一つ一つ吟味して読むときには適しません。文章全体を俯瞰したり、構造を視覚的に捉えたりするときにはとても有効なツールとなります。

例えば、「ちよつと立ち止まって」の授業では、全文表示画面を使って、本文全体を「序論」「本論」「結論」に分け、さらに「本論」の部分を「絵の説明」と「筆者が伝えたいこと」の二つの要素に色分けしました(右ページ図参照)。全文表示にすると、全体を俯瞰しながら考えることができますし、本文全体に占める文章量や配置なども視覚的に捉えることができます。例えば、この文章の場合は「事例」+「主張」の組み合わせで本論が進んでいることがわかります。

そして、デジタルであることの便利さが特に感じられるのが、書き込みなどの作業をするときです。失敗しても何度でも書き直せますし、色分けやマーキングなども簡単にできます。授業では、生徒が考えた色分け案を発表してもらい、全体で確認しました。何度でも書き直せる

という詩を、壮年のおじさんバージョンで読んだり、もうすぐ死を迎えるおじいさんになりきって読んだり。こうして複数の人物設定で読み方を工夫することで、指導事項にある「音読の効果」に自然と意識が向くと考えたのです。単元の最後には、自分たちが選んだ「のはらうた」の詩を、二つのパターンの人物設定で読み分けた朗読の発表会を行いました。

こんなふうには、デジタル教科書の動画資料から「のはらうた」の単元を作ってみました。

## ②教科書への書き込み

(「ちよつと立ち止まって」)

普段使いでデジタル教科書の力を実感するのが、さまざまな本文提示機能、そして書き込み機能です。例えば、教科書の文章を提示する機能には次の三通りがあります。

- A 教科書の紙面と同じ画面を表示する(教科書画面)
- B 教科書の本文を拡大して表示する(本文画面)
- C 全文を表示する(全文表示画面)

この中ではAを使うことがいちばん多

るデジタル教科書のメリットを生かすことができた活動だったと思っています。

やや地味な活用例かもしれませんが、でも、国語科で、普段使いでデジタル教科書を活用する場合、本文を提示し、生徒全員で共有するというのは最も基本的な使い方なのではないかと思えます。今までは、本文を全員で読んでいくとき、「何ページの何行目の……」と言葉で説明するしかなかったのですが、デジタル教科書で本文が提示できれば、そのような手間は必要ありません。映し出された本文を、「ここ」と指し棒で示せば一発で共有することができるようになります。「国語の授業は本文から離れないことが大事」「本文の言葉にこだわること」という基本を、教師も生徒も意識することができたのはデジタル教科書のおかげです。

## ③漢字のフラッシュカード

デジタル教科書にはいろいろな「おまけ」がついていて、その中の一つにフラッシュカードがあります。漢字・言葉・古典の三種のカードがあり、いつでも使えるようになっていきます。私が四月からよく活用していたのが、この漢字のフラッシュカードでした。

実は、漢字の「読み」は、意外と学習



上/「絵の説明」と「筆者が伝えたいこと」とで色分けした全文表示画面。  
右上/教科書画面。右下/本文画面。

する機会が少ないのです。音読をさせてみると、ごく簡単だと思っていた漢字の読みに詰まる生徒がいてびっくりします。漢字の学習は「書き」に教師の意識が向きがちですが、「読み」も同じように学習する機会がないと、正しく読めないままになってしまい、生徒が社会に出てから恥ずかしい思いをさせてしまいます。

このフラッシュカードは毎時間の冒頭のほんの数分、何度も読みを繰り返すことで知識を確実なものにしていくことができます。テンポよく読み上げて授業をスタートさせれば、きりつとした雰囲気を作ることもできます。授業のウォーミングアップにはぴったりです。この他にも、生徒の集中が途切れたとき、ちよつと時間が余ったときなんかにもこういうツールがあると助かりますよ。

ひとまず初回は、四月からの授業で、私が実際にどのようにデジタル教科書を使ってきたかをご紹介します。便利な使い方は、まだまだたくさんあるのですが、続きは次回。

質問がある先生、「私はこんな使い方をしてるよ」というアイデアがある先生、ぜひご連絡ください。デジタル教科書の活用法を一緒に考えていきましょう。